

彙報

第八回總會および研究集会

木簡学会第八回總會と研究集会は、一九八六年二月六、七日の両日にわたって奈良女子大大会館、および文学部において、約一二〇名の参加者を得て開催された、会場には平城宮跡、藤原京跡、大阪府柏原市安堂遺跡、大阪市道修町遺跡等出土の木簡が展示され、関心をよんだ。

◇二月六日(土)(午後一時—五時)

第八回總會(議長 虎尾俊哉氏)

最初に平野邦雄副会長の挨拶があり、会員が二一八名になり今後は会員数と会の運営とのバランスが考えられなければならないこと、また委員については改選の時期を迎えていること、雑誌以外の会員へのサービスとして各地での木簡出土遺跡の見学会も企画したいとおもっていることなどが述べられた。つづいて、議長に虎尾俊哉氏を選出して議事にはいった。

会務・編集報告(佐藤宗諄委員)

会員数は、一三名の新入会員を迎えて、二二〇名になったが二

名の退会者があったので現状は二一八名であること、また外国人会員については雑誌代と送料のみで会員扱いとすること、会誌八号の編集経過、会誌代金の据え置き等が報告され、承認された。会計報告(岩本次郎委員)

一九八五年度の会計報告が行なわれ、年度の収支についての説明があり、ひきつづいて関見監事から会計の執行が正当、適切に行なわれている旨報告があつて、異議なく承認された。

ひきつづき、委員、監事の改選が行なわれ、新委員、監事が選出された(一八三頁参照)。

研究集会(司会 早川庄八氏)

木簡と表記史

土器墨書論—地方官衙の事例を巡って

稲岡耕二

原秀三郎

稲岡氏の報告は本誌に掲載することができた。原氏の報告は、土器墨書という用語およびその性格と分類とについての一般論を展開した上で、坂尻遺跡の事例をとりあげて具体的な報告がなされた。

研究集会終了後、 Grill 友楽で懇親会がひらかれた。

◇二月七日(日)(午前九時—午後三時三〇分)

研究集会(司会 佐藤宗諄氏、青木和夫氏)

一九八六年出土の木簡

長岡京左京二条二坊六町出土の木簡について

寺崎保広

清水みき

大阪市東区道修町出土の豊臣時代の木簡について 中尾芳治
一九八六年度平城宮跡出土の木簡 館野和己

寺崎報告は一九八六年に出土した木簡と八四年以前に出土した未報告の木簡を全国的に取り上げその概要を報告したものである。清水報告は、地子の荷札木簡に論点をしばって報告された。また、中尾報告は、豊臣時代の荷札木簡についての報告で、脇坂など大名の名前が見られることが注目をひいた。

それぞれの報告については、質疑討論が活発に行われ、総括討論で締めくくられた。最後に直木委員から閉会の辞があり、参加者への謝辞が述べられた。

委員会報告

◇一九八六年一月二六日（土） 於奈良国立文化財研究所

総会に先立って、会務・編集の状況、総会・研究集会の運営について検討が行なわれた。

◇一九八六年一月二六日（土） 於奈良女子大学

総会後新委員・監事によって、一九八七年度の役員を互選した。

◇一九八七年六月一七日（水） 於奈良国立文化財研究所

新入会員の承認、一九八六年度の会計報告、木簡研究九号の編集計画、研究集会の内容の検討、十周年記念事業の計画についてなどが論議された。同日、会計監査もおこなわれた。

◇一九八七年十一月一日（水） 於奈良国立文化財研究所

新入会員の承認、研究集会の内容の検討、八七年度前半の会計報告などが行なわれ、十周年記念事業として記念出版を行なうことが決った。

木簡学会役員

会 長	平野 邦雄	田 中 琢	狩 野 久
副 会 長	大庭 脩	岩 本 次郎	佐 藤 宗 諄
委 員	青 木 和 夫	笹 山 晴 生	町 田 章
	鬼 頭 清 明	原 秀 三 郎	吉 田 孝
	早 川 庄 八	八 木 充	
	松 下 正 司		
監 事	和 田 萃	長 山 泰 孝	栄 原 永 遠 男
幹 事	田 中 稔	加 藤 優	東 野 治 之
	綾 村 宏	寺 崎 保 広	
	館 野 和 己		
	橋 本 義 則		